

米川の水かぶり祭り

米川の水かぶり祭りは、登米市で最も盛大に祝われる文化行事の一つです。この祭りは、古代の防火儀式に基づいており、登米市の五日町（Itsukamachi）地区の男性たちが、藁で作られた装束を身にまとい、町内を練り歩きながら建物に水をかけ、奇声を上げるというものです。祭りの名称「水かぶり」は、「水をかける」という意味を持ち、その内容を反映しています。

祭りの開催日には毎年変動がありますが、毎年 2 月に行われます。

祭りの正確な起源は不明ですが、口伝によると 18 世紀中頃に始まったとされています。その後、戦争や自然災害にもかかわらず、住民たちはこの祭りを続けてきました。2018 年には、ユネスコによって無形文化遺産代表リストに登録されました。

祭りの朝、午前 8 時ごろ、五日町の男性たちは「水かぶり宿」と呼ばれる家に集まります。そこで、藁を使って装束を作り、それによって彼らは人間から火の神の化身とされる「来訪神」（raiho-shin）になります。三角形のケープのような衣装の作り方は、町の長老たちが指導し、若い参加者たちにその技術を伝授します。家ごとの伝統に合わせて、頭にかぶる装飾（「アタマ」と呼ばれる藁で作ったヘッドピース）の作り方も教えられます。また、家族のアイデンティティだけでなく、地域のアイデンティティも重要とされ、五日町以外の者が来訪神に加わると、火事が起きると信じられています。

装束が完成した後、男性たちは白いベスト、腰巻き、藁の草履を身に着け、次に、宿のかまど

で取った煤を顔に塗り、人間の姿を隠し、火の神になります。その後、しめ縄という藁を編んだロープを腰や上半身に巻き、藁の輪または首飾り（「ワッカ」と呼ばれる）を加えます。最後に、藁を束ねて作られた大きな頭飾り（「アタマ」）をかぶります。

午前 10 時ごろ、五日町の 60 歳の男性が先頭の梵天を持つ役に選ばれ、宿から大慈寺の秋葉山大権現に向かい、神社の屋根に水を注ぐ儀式を行います。その後、祭りの本番が始まり、藁で作られた火の神たちが町を練り歩き、「ほー、ほー」と叫びながら建物の屋根に水をかけ、火除けを祈ります。祭りの一団とは別に、2 人の仮面をかぶった人物が、コミカルな役割を演じ、祭りのための寄付を集めています。1 人は「火男」と呼ばれるヒョットコで鈴を鳴らし、もう 1 人は桶を持ったオカメです。

男性たちの装束の藁は、火除けの効果があると考えられています。水をかけ始めると、観客たちはその行列の中に駆け寄り、男性たちの衣装から藁を引き抜き、一年間自分の家を守るお守りとして使います。祭りの行列が終点に到達する頃には、男性たちの装束は観客たちに藁を抜き取られ、下着と数本の藁しか残っていないこともあります。